所報ふくしま
窓
福島県教育センター
2013.10
No.165
「窓」に寄せる思い
～教育に寄せる心を開く小さな「窓」～
小さな「窓」から広がる教育の世界が見えてきます。

# 希望を

所長　青山　修身

かつて、ルイ・アラゴンが、「教えるとは　希望を語ること　学ぶとは　誠実を胸に刻むこと」（大島博光訳『ストラスブール大学の詩』）と謳いました。ときあたかも第二次世界大戦、燎原の火のように欧州大陸に戦火広がるさなかでした。彼が生きた時代、教職員や学生が投獄されたり、銃殺されたりする状況下、教え、学ぶことは、ともに希望を語り合うことにほかなりませんでした。それは、ときを隔て、遙か、秋桜咲く国の東北、ここ福島において、未曾有の困難な状況が続く今こそ同様ではないでしょうか。

黒板に書かれた「hope」という単語を、皆さんの発音を追って児童生徒が復誦します、「hope」と、希望と。それは、ひとの胸についに消えることのない、灯火のことです。昼休みの教室で彼らが級友と将来の自分たちの姿を想い描くとき、放課後の職員室で皆さんに進路に関する悩みを相談し、アドバイスに耳を傾けるとき、彼らは、級友や皆さんと、ともに希望を語り合っているのです。教え、学ぶ場である学校は、誠実さを胸に刻みつつ、教える者も学ぶ者も、ともに希望を語り合う場なのです。

ひとにはそれぞれ異なる資質や能力があり、異なる状況の中で、それは、ときに行く先も見えず、つらく苦しいものかもしれませんが、ひとは、自らの資質や能力を何とか伸ばし、高め、少しでもより良い人生、価値ある人生を生きていこうとします。

希望を持つことは、生きていこうとすることです。地割れが如何に激しく大きかろうと、津波が如何に高く冷たかろうと、絶望が如何に深く暗かろうと、希望に勝る、地割れも津波も絶望もありません。地割れに津波に絶望に、敗れ去る希望はありません。ひとは、その一筋の灯火をひとからひとへと繋ぎ続けて来たのです。

かつて、ジョン・ダンは祈りました。どこかで誰かが失われます、鐘が鳴ります。あの鐘は誰のために鳴っているのですか。それは、あなた自身のために鳴っているのですと。

あの日、たとえ家屋が壊され、流されなくても、愛しいひとと離れなくても、私たちの心を地割れが走り、私たちの魂にまで津波は達しました。あの日、遠く見知らぬ誰かのために嗚咽・慟哭し、掌を合わせたのは私たちです。未だ、そのひび割れは塞がれず、水は引いていません。しかし、私たちは、その喪失を心から抱きしめて、その悲しみに寄り添って、歩み出す覚悟を固めました。この時代にあって、それぞれが、それぞれの立場でなし得ることを、なすべきことをなしましょう。あるいは仮設校舎にあって、あるいはサテライト校舎にあって、改めて、私たちは、児童生徒一人ひとりの自己実現、進路実現に向けて、そして彼らが３・１１後の新たな、より良い世界の創造に、その一員として参画して行くようサポートに努めようではありませんか。

「なんぴとも一島嶼にてはあらず　なんぴともみずからにして全きはなし　人はみな大陸の一塊　本土のひとひら　そのひとひらの土塊を　波のきたりて洗いゆけば　洗われしだけ欧州の土の失せるはさながらに岬の失せるなり　汝が友どもや汝みずからの荘園の失せるなり　なんぴとのみまかりゆくもこれに似て　みずからを殺ぐにひとし　そはわれもまた人類の一部なれば　ゆえに問うなかれ　誰がために鐘は鳴るやと　そは汝がために鳴るなれば」（大久保康雄訳　アーネスト・ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』）

当センターは、福島の教育の再生・復興に向けて、全ての本県教職員の方々とともに歩を前へ進めてまいります。

本誌に関するご意見・ご感想、並びに研修に関するご質問等がございましたら、下記連絡先までお寄せください。

編集発行　：　福島県教育センター　〒９６０－０１０１　福島市瀬上町字五月田１６番地
TEL　０２４－５５３－３１４１（代表）　FAX　０２４－５５４－１５８８
URL　http://www.center.fks.ed.jp/　E-mail center-kikaku@center.fks.ed.jp

指導改善研修支援チームからの発信

# ＯＪＴを用いた研修で教師力アップ!!

学習指導・学級経営・生徒指導に困っていませんか？

・子どもが授業に集中していない。
・予想していた反応がない。
・教材研究の仕方が分からない。

・学級の雰囲気に落ち着きがない。
・子どもの問題に積極的にかかわれない。
・子どもの心が分からない。

このように、教師が日々の指導に不安や悩みを抱えていると、教師だけでなく目の前の子どもたちにとってもよい影響がありません。そんな教師が悩んでいる姿を見ている管理職も、「何とかしてあげたい」と思っていることでしょう。

そこで、自己の課題に応じた教師力アップの研修を、先輩教師や管理職に相談しながら、OJT の手法を取り入れて実践してみてはいかがでしょうか。

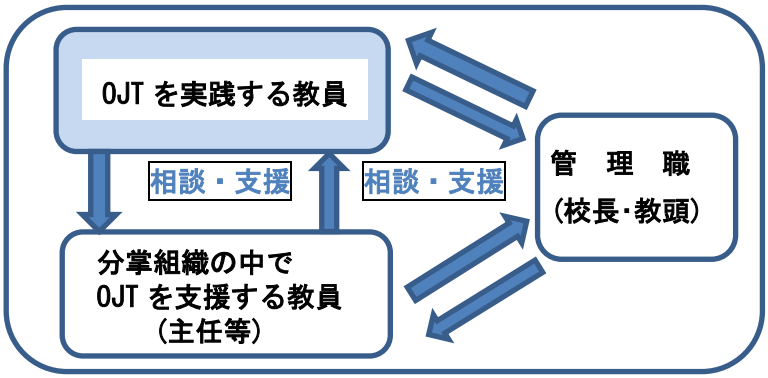
## ＯＪＴ(On The Job Training)とは？

OJT とは、On The Job Training の略で、「日常的な職務を通して、必要な知識や技能、意欲、態度などを意識的、計画的、継続的に高めていく取組み」のことです。

学校で普段行われる校内研究は、共通の研究テーマを掲げて検証していくため、個人の課題を解決することを目的とした研修とは違った取組みとなることがあります。OJT を用いた研修を行うことで、自己の課題を明らかにし、支援する教員や管理職と協力しながら研修を進めるため、日常的に相談したり助言を受けたりすることができるなど、OJT を実践した教員の教師力アップが期待できます。また、支援する教員は、実践教員を支援する立場からかかわりをもつことで自身の研修にも役立ちます。

### ＯＪＴを用いた研修のイメージ

- 自己の課題による研修
- 実践に結び付く研修
- 組織を生かした研修

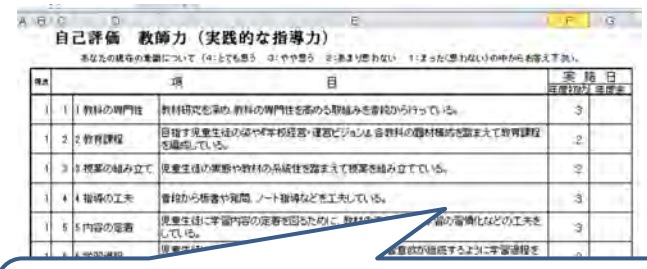



## ＯＪＴによる研修の進め方

(※1)～(※4)の様式は、福島県教育センターWeb サイト からダウンロードできます。

### 1　実態把握

○自分の実践を客観的に振り返り、自己の課題を明らかにします。




○授業、学級経営、生徒指導、人間関係など、視点を明確にして自己課題を把握します。
○自己評価票(※1)を使うとより客観的に自己評価ができます。

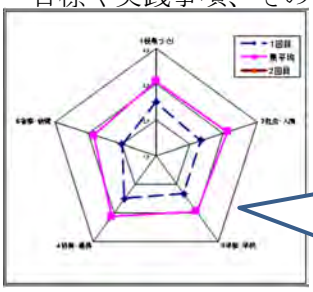
### 管理職(組織)としてのかかわり

○校長は OJT 研修について全職員へ周知します。
○OJT 実践教員の実態を把握します。
○OJT 実践教員本人と実態について話し合い、共通理解を図ります。

**管理職（組織）としてのかかわり**

## 2　課題設定

○OJT 実践教員が自己の課題を明らかにし、管理職の助言をもとに目標や実践事項、その手立てを具体的に決めます。

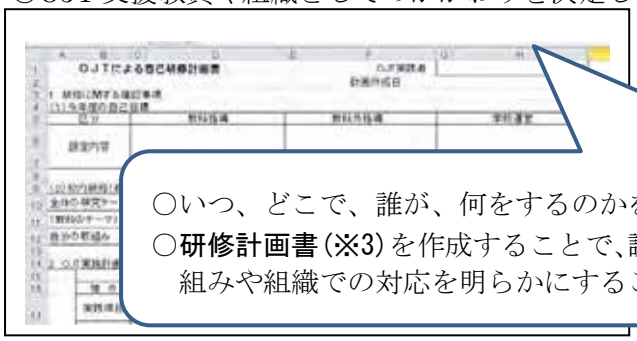


○重点的に取り組む視点や内容を明確にし、取組み方やめざす姿、具体的な手立てを決めます。
○視点別に評価の値を**レーダーチャート**（※2）などに表すと、実態をとらえやすくなります。

○OJT 実践教員との面談を通して、具体的な実践事項について指導助言を行います。

## 3　研修計画と研修組織の確立

○OJT 支援教員や組織としてのかかわりを決定します。

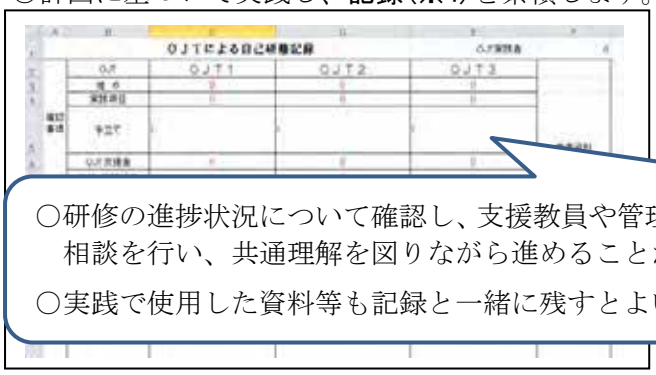


○いつ、どこで、誰が、何をするのかを明らかにします。
○**研修計画書**（※3）を作成することで、課題解決のための取組みや組織での対応を明らかにすることができます。

○OJT 実践教員の課題に沿って支援教員を選定します。
○OJT 支援組織を確立し、研修内容と方法の共通理解を図ります。
○研修の日程調整をします。

## 4　研修の実践と記録

○計画に基づいて実践し、**記録**（※4）を累積します。



○研修の進捗状況について確認し、支援教員や管理職へ報告・連絡・相談を行い、共通理解を図りながら進めることが大切です。
○実践で使用した資料等も記録と一緒に残すとよいでしょう。

○授業観察や日常的な職務の観察を通して指導・助言を行います。
○進捗状況を確認し、共通理解を図りながら研修を進めます。
○適宜賞賛や励ましの声をかけます。

国語科の「読む力」の育成を視点に、教科指導を充実させたい。

**管理職**：授業観察、指導助言、進捗状況の確認、支援教員との情報交換

**OJT の実践**：言語活動の工夫「説明文読み取りのポイント」作成

**支援教員**：相互の授業参観、参考図書の紹介、単元の共同作成

・読みの力を向上させる授業実践ができた。
・支援教員に相談しやすい環境で、助言を授業業実践に生かすことができた。

## 5　研修の振り返りと評価

○研修計画書や研修記録をもとに研修を振り返ります。
○「**1　実態把握**」で使用した自己評価票をもとにすると、研修前の結果と対比することができ、変容が明らかになります。
○成果と課題を明らかにして、残された課題については更に研修を継続させるとよいでしょう。

○具体的な事実の累積により、客観的な評価を行い、説明をします。
○残された課題について指導・助言を行います。


【参考文献】
1)「『学校経営・運営ビジョン』実現のための組織力、特に教師力向上の在り方
　－教師の自己診断を生かした OJT 実施の工夫－」（福島県教育委員会　2008 年）
2)「教師の実践的な指導力を高めるために～OJT ツールを用いた自己研修～」（福島県教育センター）
3)「OJT ガイドライン～学校における OJT の実践～」（東京都教育委員会　2010 年）
4)「はじめよう OJT　授業力向上をめざして」（福岡県教育センター　2011 年）

調査研究チームからの発信

# 授業力の向上に係る研究

## ～算数・数学等の授業を進める上での教師のコーディネートの在り方について～

当教育センターでは、今年度は、「授業」や「授業力」そのもののとらえ方をもう一度見直すことにしました。今、福島県の子どもたちに必要な授業とは何かを考え、更に、授業中の教師の“授業の進め方”の部分に絞って研究を進めています。

## 1 授業でめざすべきものは何か

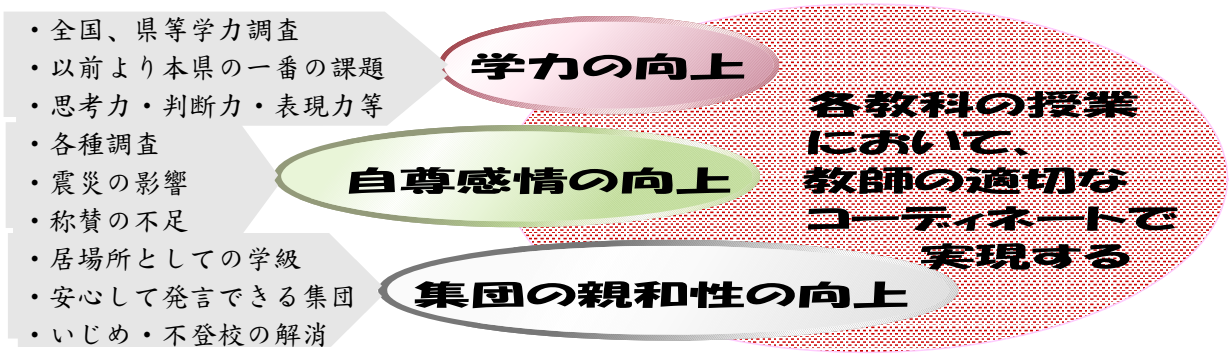
授業に求められるもの、それはまず第一に**「学力を向上させること」**です。これは、全国学力・学習状況調査の結果からも明らかで、以前より本県教育の一番の課題と言われてきたところです。特に、「思考力・判断力・表現力等」をいかに伸ばすかということが大きなテーマとなっています。

更に、全国学力・学習状況調査の質問項目の「自分にはよいところがあると思いますか。」に対して、福島県の児童生徒は「そう思う」と回答した割合が全国平均を大きく下回っていました。これは平成24年度も25年度も同じでした。震災の影響などもあるのでしょうか。このことも大きな課題であり、**「自尊感情を向上させること」**も授業に求められることであると考えられます。

また、以前行った言語活動の研究においても、活用力の研究においても、大切なポイントであると思われたことが、学級集団の親和性ということです。安心して自分の考えを話したり、分からないと言えたりすることがいかに大切かは言うまでもないことだと思います。**「集団の親和性を向上させること」**も授業に求められることであると考えられます。

「自尊感情の向上」「集団の親和性の向上」については、特別活動や道徳の中で特に重視されていますが、教科の授業の中でも大切にしていかなければならないことです。上記の三点をすべてめざす授業づくりが必要だと考え、授業力を次のようにとらえました。

**「授業力」とは…**　児童生徒の認知面、情意面の両方を上手にコーディネートして、内容の理解、自他の尊重につなげるように進めていく力。




## 2 コーディネートするとはどのようなことか

昔から、授業の上手な先生はたくさんいました。しかし、その先生の「授業の腕前」にあたるものを具体的に説明するのは難しいことだったのではないでしょうか。授業中に何を見て、それをどう解釈し、どの引き出しから何を取り出し、次の一手をどう打っていくか…それはまさに本人にしか分からない瞬間的な判断の連続なのだと思います。

「学力の向上」「自尊感情の向上」「集団の親和性の向上」の三つを追求して授業を進めようとするときには、まず「問題解決的な学習過程」をつくり出す必要があります。そして、その授業の流れの中で考えをみんなに広げたり、戻したり、つなげたりして、すべての子どもたちが「思考力・判断力・表現力等」をフルに発揮できるように支援していく必要があります。

また、子どもたちの発言や態度に対して、適切にほめたり、価値付けをしたり、解決に役立ったことを気付かせたりすることも大切です。これらは「自尊感情の向上」につながると同時に、「学力の向上」にもつながります。

更に、教師によって認められた子どもたちは、自分も他の子どもを認めるようになっていくでしょう。安心して間違うことができ、安心して分からないと言える学級でこそ、発言も相談も学び合いもできるのだと思います。親和的な学級集団がよい学びを保障すると言えるのではないでしょうか。

授業中に、教師は本時のねらいの達成に向けて展開していきます。そのときに、子どもの状況・状態を的確にとらえ、適切にコーディネートして「学力の向上」「自尊感情の向上」「集団の親和性の向上」につなげていきたいものです。

**「コーディネートする」とは**

学力の向上、自尊感情の向上、親和性の向上をねらいとし、子どもと教材、子どもと子どもとを結ぶことを重視しつつ、授業を構想し、実行していくこと。

## 3 コーディネートのポイントは何か

コーディネートのポイントについては、今のところ、次の八つを考えています。

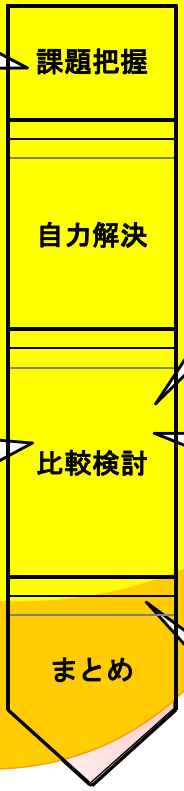
■■Point①
**温かさ，受容的・共感的な態度**
・子どもは未熟。間違えながら成長するという基本認識・姿勢
**P58-61「学級集団づくりを意識する」**

■■■Point②
（子どもを）**みる，見取る**
・子どもの学習状況や内面を見取る
**P46-49「子どもの姿を見取る」**

■Point③
（問いや学習意欲を）**引き出す**
・友だちの考えを聞きたくなる学習課題
・友だちの考えと比べたくなる学習課題
**P24-27「よい学習課題を設定する」**

■■■Point④
**価値付ける，ほめる**
・発表等をさせたら必ず価値付ける
・「自信を持たせる」「自己有能感を培う」という基本姿勢
**P32-35「『共有』と『吟味』の活動を入れる」**
**P58-61「学級集団づくりを意識する」**

■■Point⑧
**ならぬものはならぬ**
・学習規律のある安心した学習空間づくり
**P58-61「学級集団づくりを意識する」**




■■Point⑤
（考えを）**つなげる，広げる**
・どう考えたのかを考えさせる
・友だちのよさを全体に広げる意識
**P32-35「『共有』と『吟味』の活動を入れる」**
**P50-53「子どもの考えや発言をコーディネートする」**
**P58-61「学級集団づくりを意識する」**

■■Point⑥
**「あの子」**
・活発で活動的な子どもだけに頼らない
・物静かな「あの子」も生かす
**P54-57「個々の子どもに対応する」**

■■Point⑦
**分かる，できる**
・45～50分後に「できた」「分かった」「役に立った」等を感じることができる授業
**P28-31「ねらいとまとめの整合性を図る」**
**P36-39「振り返りの場を設定する」**

問題解決的な授業のどの部分で，特にどのポイントが大切かということを図示しました。

□は、■学力の向上、■自尊感情の向上、■集団の親和性の向上を表しています。また、吹き出しの中に示されたページ数は、各学校にお配りした「授業改善ハンドブック　新・授業の窓『授業をつくる16の視点』」の掲載ページを表しています。

これらのポイントについて、さらに具体化・一般化を図ることができるように研究を進めていきたいと思います。

教員研修チームからの発信

# 子どもの体力向上に向けた体育の授業の充実を！

ーピンチをチャンスに！「分かる」「できる」「楽しい」体育の授業をめざして!!ー

平成24年度の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」により、福島県の未来を担う子どもたちの体力低下が、喫緊の課題として明らかになりました。このピンチをチャンスに。明らかになった課題を解決すべく子どもの体力を高めるチャンスとしてとらえて、体力向上の意識を高めていきませんか。

そのために私たちが今すべきこと、それは、何といっても授業の充実ではないでしょうか。同調査によると体育の授業において「分かる」「できる」「楽しい」と答える子どもは「体力の合計点も高い」という結果が示されました。ただ、福島県の各学校の取組みについては、右の点に課題があることが分かってきました。

このような課題を解決するために、「分かる」「できる」「楽しい」体育の授業の実現に向けて、授業づくりのポイントを２点紹介します。

①「運動に対する関心・意欲を高める」

②「運動の楽しさを感じさせる」

③「運動への段階的な指導の工夫」

## ポイント１　魅力や特性を踏まえた教材の工夫

ポイントの一つ目は、教材です。その運動の持つ魅力や特性を踏まえ、「教師の教えたいこと」が「子どもの学びたいこと」に変わっていく。そのような教材をつくることが子どもの授業への積極的な参加を促すことができると考えます。「よい授業の出発点は教材づくりから」と言っても過言ではありません。そこで、教材づくりのポイントを右に四つ挙げます。

＜教材づくりのポイント＞

[1] 子どものつまずきを直視する

[2] すべての子どもを運動の楽しさに出合わせる

[3] 集団的達成の喜びに目を向ける

[4] 本質的な運動技術を問い直す

### 「易しい」ベースボール型ゲーム

このポイントを踏まえ、考えたのが、以下の球技系「ベースボール型ゲーム」の教材「ターンベースボール」です。

ベースボール型ゲームを実践する上での最大のつまずきは、複雑なルールです。学習指導要領では、球技系は小学校から高等学校まで一貫して「○○型」と分類されました。これは、一つのスポーツのイメージにとらわれることなく、柔軟な発想で、○○型に共通する魅力や特性を十分に味わわせたいという背景があります。

小学校３・４年生では「易しいゲーム」５・６年生では「簡易化されたゲーム」と示されました。そうです。「易しい」「簡易化された」ゲームでいいのです。

今回紹介したゲームは、少人数のチーム編成なので、すべての子どもが本気で打ったり、力を合わせて守ったりしないと勝つことができません。また、シンプルなルールのおかげで、どの子どもも「もっと遠くにかっ飛ばしたい」「点数をとられたくない」といったベースボール型の持つ「楽しさ」を共有することができます。

そして、この共有された思いこそが原動力となり、教師が学ばせたい「打つ」「投げる」「捕る」といった基本的な動きを、「子ども自ら」互いに高め合うようになります。

＜ターンベースボールの主なルール＞

○　１チーム２人～３人

○　打者一巡で攻守交代

○　ピッチャーは同じチームから

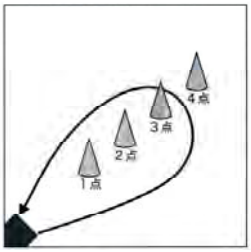
【攻撃】

■　打者が打ち，アウトにされずにコーンを回って本塁に帰ってくることができれば得点

■　何回，往復してもよい

【守備】

■　守備側は，捕球したらランナーの先回りをするようにベースにタッチすればアウト




＜さらに一工夫ルール＞

【攻撃】

■　打者がホームまで戻ってもアウトにならない場合には，次打者がタッチして走者となる

※　教具の工夫として…

・バット→テニスラケット

・ソフトボール→スポンジボールやゴムボール

小学校のみならず、中学校でもこのような子どもにとって易しい教材を、単元の初めに取り入れてみてはいかがでしょうか？「〇〇って難しい」「痛くてこわい」という印象からではなく、「かっ飛ばすって気持ちいい！」「できた！おもしろい!!」から始まる体育へ。このような体験の積み重ねが、中学３年生から始まる選択の授業の際、「どれも楽しいんだよな」というようなうれしい悩みにつながり、さらには生涯においてずっと続けていきたくなるスポーツとの出合いにつながるのではないかと考えます。

陸上運動でも器械運動でも教材の工夫によって「楽しい体育」が実現できます。そのような「楽しい体育」が体力向上の近道だと信じています。

## ポイント２

## 心と体のスイッチを入れる「運動身体づくりプログラム」の充実

運動身体づくりプログラムとは、平成18年度に福島県が福島大学と協同で作成した準備運動及び補強運動を合わせた「動ける体」「動きたい体」を養うための運動プログラムです。準備運動を終えた後の基本パターンは右の通りです。

このような運動を小学校６年間、毎回授業始まりの８分間、実施し続けたならば、子どもたちの体はどのような運動に出合っても、ある程度対応できる体になっていくはずです。試しに、実際に体験してみてください。かなりの効果を体験できるはずです。「動ける体」「動きたい体」になるようプログラミングされています。

さらに、効果を上げるために、以下のような点に配慮して実施していただければと思います。このような視点は、中学校、高等学校における準備運動、補強運動の改善・工夫の鍵にもなります。

＜基本パターン＞
スキップ
バック走
犬走り
かえるの足うち
うさぎ跳び
カンガルー跳び
サイドステップ
クロスステップ等

【視点１】その運動は，どのような効果があるのかを意識すること
→　ウサギ跳びは，体を腕で支える感覚を養っているのだな。
→　跳び箱の抱え込み跳びの動きにつながるぞ。
→　着いた手よりも脚が前に着くことができるくらい，腕の突き放しができるといいな。

【視点２】子どもの心をくすぐるちょっとしたバリエーションの引き出しを持つこと
→　友だちと手をつないでサイドステップをしてみよう。
→　すれ違う時にボールをパスしてみよう。
→　前転をしてから，スキップしてみよう。

福島県教育センターでは、これまで示してきたような「教材の紹介」や「運動身体づくりプログラム」について講座を開催しています。

**■■小学校運動身体づくりプログラム講座■■**

小学校体育の授業を行っている先生を対象に，県内６か所の会場で講座を開設しています。講座に参加することによる負担をできるだけ軽減し，少しでも多くの先生方に参加していただけるよう平日の午後から実施しています。

**【受講者の声】**

□　変化のある繰り返しで子どもたちも楽しく体力向上が図られると思った。

□　何となく形をまねてやってみるのと、意義を理解して意図的に行うのでは似て非なるものがあると反省した。

□　自分でやってみて「友だちと一緒」というのが「楽しくて気分もいい!!」。ぜひ子どもたちにも味わわせてあげたい。

# 平成 25 年度福島県教育研究発表会
## ～先進的な研究に触れ、明日へのヒントを得よう！～

教育センターでは、県内公立学校教員の優れた教育実践・研究及び当センターの研究の成果をもとに、意見交換や交流を通して本県学校教育の向上に資することをねらいとして教育研究発表会を実施しています。今年度は、学習指導、教科指導、教育相談、情報教育等について、15 名（チーム）の研究・実践発表と講演会を予定しています。

講演会は、秋田県総合教育センター名誉所長（元秋田県教育委員会教育長）小野寺　清氏による『学力向上に奇策なし ～「変わらない」から「変わる」への挑戦～』を行います。県内各教育機関をはじめ、教育に関心のある多くの方々の参加を心よりお待ちしております。詳しくは、福島県教育研究発表会２次案内、教育センターWeb サイトをご覧ください。

□期　　日　平成 25 年 11 月 28 日（木）　10:00 ～ 16:00
□会　　場　福島県教育センター（福島市瀬上字五月田 16）
□参加申込　教育センターWeb サイトから申込用紙をダウンロードして、11 月 14 日（木）までに E-mail で申し込んでください。

# カリキュラムセンター事業のご案内

カリキュラムセンターは、県内の先生方や学校が日常の教育活動でお困りのことについて相談を受け、支援を行う窓口です。

＜カリキュラムコンサルティング内容＞
・教育課程、教科指導　　・授業構想
・具体的な指導法　　・教材・教具　など

**１　教員研修の支援（小･中･高等学校等への積極的な支援を進めます）**
○　学校、教育委員会、各種研究団体へ指導主事を派遣します。
○　テレビ会議システムを活用した校内研修を支援します。

※　9 月 15 日現在の学校等への指導主事派遣数（校内研修、出前講座等）は 109 件で、のべ 3, 401 名の先生が参加しました。年度末までの予定を含めると、183 件の派遣を計画しています。テレビ会議システムを活用した研修支援も含めて様々なサポートを進めておりますので、お気軽にご相談ください。

**２　カリキュラムに関する情報・資料の収集と提供**
**３　Web サイトを通した教育資料・情報の提供**
○　授業づくりをサポート（学習指導・教科指導）　○　聴講講座等の情報提供と研修の支援

※　教育センターでは、大学教授や学校心理士をはじめとする専門家の講義に聴講制度を設けております。ぜひ、ご利用ください。

# ＦＫＳテレビ会議システム

◆　FKS 利用機関以外との接続も可能です。

**出張サポート実施中です。**

多忙化解消・旅費の節約に！
＜ 活用例 ＞
・学校間の交流授業
・教育文化施設との遠隔授業
・各種会議等
・部活や生徒会の交流
・外部講師による講演等の複数校配信

詳しくは http://www.fks.ed.jp/meeting/ をご覧ください。
技術的なお問い合わせ、サポート申込みは、

ふくしま教育総合ネットワーク（FKS）
TEL　024-552-2151
e-mail　help@fks.ed.jp